



## 青年期における多次元共感性と自己関係づけの関連

佐村, 志穂美

齊藤, 誠一

---

**(Citation)**

神戸大学発達・臨床心理学研究, 15:7-12

**(Issue Date)**

2016-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/E0040944>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0040944>



# 青年期における多次元共感性と自己関係づけの関連

## The Relationship between Multidimensional Empathy and Self-Reference Tendency in Adolescence

佐村 志穂美\* 齊藤 誠一\*\*

Shiomi SAMURA\* Seiichi SAITO\*\*

**要約:**本研究の目的は、青年期における共感性の傾向が、自分に向けられたのではないかもしれない出来事に対して自分がその出来事の対象ないし被害者であると過剰判断する傾向である自己関係づけに及ぼす影響について、共感性の情緒的側面・認知的側面と自己指向性・他者指向性という2つの観点から検討することであった。大学生144名を対象に質問紙調査を行い、多次元共感性尺度と自己関係づけ尺度への回答を求めた。その結果、程度の差はあるが共感性のいずれの下位尺度も自己関係づけに影響を及ぼしていることが示された。なかでも、他者の意見や感情に影響されやすい素質的な傾向である被影響性と自己に焦点をあてて共感する傾向である自己指向性が自己関係づけを引き起こしていることが明らかになった。性別ごとに検討を進めた結果、男性の場合は、被影響性の高さに加えて、相手の立場に立って正しく理解しようとする認知的傾向である視点取得の低さが自己関係づけを引き起こしていること、女性の場合は、被影響性の高さで自分に焦点を当てて情緒的に反応する傾向である自己指向的反応の高さが自己関係づけを引き起こしていることが示唆された。以上の結果より、自己関係づけをもたらす共感のありかたには性差がある可能性が示された。

### 1. 問題・目的

青年期は他者や社会との関係性の軸の中で自分探しを行う時期であり(伊藤, 2006), 生物学的のみならず心理社会的にも「揺れ動きの時期」であると表現される(森岡, 2006)。青年期では、他者が何を感じ考えているかという疑問に特に敏感になると言われている。

金子(2000)は、自己への関心の高まりに伴い、自己と他者の関係に敏感になり、他者の言動が気になるという青年期の発達の特徴から、自己関係づけという青年期心性を見出している。自己関係づけとは、自分に向けられたのではないかもしれない出来事に対して、自分がその出来事の対象ないし被害者であると過剰判断する傾向であり、“話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる”、“知人が挨拶をしにくれなかった時に、無視されたと思うことがある”などのように、他者の何でもない言動を自己に被害的に関連づける傾向とも言い表される(金子, 1999)。健常な大学生が専門家の予想より多く妄想的観念を体験していることも指摘されており(丹野・石垣・杉浦, 2000)、青年期を理解するにあたって密接に関連している概念であるといえる。

自己関係づけは、他者意識や公的自己意識との間の関連が示されており、このことから他者に関心をもつ人、または他者にどう思われているかということについての関心をもつ人ほど自己関係づけ傾向にある可能性が示唆されている(金子, 2000)。

しかし、果たして自身と他者の関係性への関心を向けることそれ自身が被害妄想的な解釈を引き起こしているのだろうか。人間は社会的な動物である以上、日常生活のなかで他者との関わりの中で他者の思考や感情の理解を試み、その結果何らかの気持ちや考えを抱くといわれている(鈴木他, 2000)。相手を思いやることや相手と親密な関係になることなど適応的な人間関係を構築するうえでも、自己と他者の関係に対して意識を向ける過程は必要不可欠である。以上を踏まえると、関心そのものではなく、関心のありかた、すなわちどのような関心を向けるかが対人関係における適応・不適応の一因を作り上げるのではないかと考えられる。本研究では、他者の心情に際して自身の気持ちがどのように向けられるか共感性によって検討する。

共感性とは、他者の心理状態へ意識を向けることから始まり、推測・判断を経て反応に至る一連の過程である(鈴木・木野, 2008)。人と人が互いに助け合い、支え合い、理解しあって気持ちよく社会生活を送るのに役立つ重要な特性であると言われており(登張, 2000)、対人関係が課題となりやすい青年期にとって重要な概念であると考えられる。

共感性は当初、認知的側面からのアプローチと感情的側面からの

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程

\*\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

アプローチに二分されていたが、近年はこれらを統合したうえで共感性を測定しようとする多次元的なアプローチが盛んになっている。鈴木・木野 (2008) の作成した多次元共感性尺度は、二つの次元、すなわち共感性を認知的側面・情緒的側面の次元と自己指向性・他者指向性の次元から測定することが目的とされている (Table 1 参照)。多次元共感性は被影響性、他者指向的反応、想像性、視点取得、自己指向的反応の5つの下位尺度によって構成される。他者指向的反応は情動的側面かつ他者指向性、想像性は認知的側面かつ自己指向性、視点取得は認知的側面かつ他者指向性、自己指向的反応は情動的側面かつ自己指向性に分類される。被影響性は情動的側面かつ指向性については自己指向性・他者指向性に共通として分類される。更に情動的側面は、観察する他者の心情をそのまま再生する並行的所産と、観察する他者の心情に対応はしているが必ずしも同じ感情を抱かない (例えば、他者の不安感に対して憐れみ、怒りを感じる) 応答的所産に二分される。

Table 1 多次元のアプローチにおける共感性の下位概念の位置づけ (鈴木・木野, 2008より引用)

	認知面	情動面	
		並行的所産	応答的所産
他者指向性	視点取得		他者指向的反応
		被影響性	
自己指向性	想像性		自己指向的反応

共感性は自己関係づけにどのように影響するのであろうか。山内・須藤・丹野 (2008) は、情緒不安定性が被害妄想観念の強さに影響している可能性を示唆している。被害妄想観念は、その大半が青年期の大学生が日常的に体験するような被害的な考えであると言及されている (山内・須藤・丹野, 2009) という点で自己関係づけと同様の傾向を測定していると考えられる。よって、自己関係づけに対しても、情緒的側面が何らかの影響を及ぼしているのではないかと推測しうる。このことより、共感性を認知的側面・情緒的側面の次元から捉えた際、情緒的側面のほうが認知的側面と比べてより自己関係づけに影響を及ぼすのではないかと仮定しうる。

守谷・佐々木・丹野 (2007) は、対人不安の維持要因であると考えられている解釈バイアスが生じる条件の一つに自己注目を挙げている。解釈バイアスとは否定的にも肯定的とも解釈できる曖昧な刺激を否定的に解釈することを指すが、相手の意図がわからないような対人状況を被害的に解釈する自己関係づけも同様の傾向を捉えていると考えられる。よって、自己関係づけが生じる背景には自己に注目が向けられる過程があるのではないかと考えられる。このことより、共感性を自己指向性・他者指向性の次元から捉えた際、自己指向性のほうが他者指向性と比べてより自己関係づけに影響を及ぼすのではないかと仮定しうる。

自己関係づけの性差について、女性のほうが男性と比べて強い傾向にあることが報告されている (金子, 2000) が、共感性との関連の観点から、自己関係づけの性差について検討する。

一般的に、共感性には性差があると考えられている。鈴木他 (2008) は、多次元共感性尺度のうち「他者指向的反応」、「被影響性」、「想像性」の3つの下位尺度において女性のほうが男性より有意に高い

値を示したことを報告している。他者指向的反応は他者指向性、想像性は自己指向性に分類される。被影響性は本来両者に共通して分類される概念として設定されているが、自己指向性にやや偏っていることが指摘されている。これらを考慮すると、共感性のなかでも特に自己指向性において女性のほうが男性と比べて強い傾向をもつのではないかと推測できる。また、登張 (2003) は、中学生の時点では女性のほうが男性と比べて高い共感傾向にあること、しかし高校生、大学生にかけて性差が減少すること、男性においては共感的関心と気持ちの想像が発達段階とともに高まり、女性においては顕著な発達の变化がみられないことを報告している。共感的関心と気持ちの想像とはそれぞれ鈴木他 (2008) の他者指向的反応と視点取得に対応していると考えられるが、これらはいずれも他者指向的な側面である。このことから、男性は思春期から青年期に移行するなかで女性と同程度の他者指向的な共感を習得すると考えられる。以上をまとめると、大学生男女において、共感性のうち自己指向的な側面は女性のほうが強い傾向をもち、他者指向的な側面は男女ともに同程度の傾向をもっていると想定できる。先述した通り、自己関係づけは自己に注目することで強まる可能性が考えられるため、女性においては本来もっている自己指向的な共感の強さによって自己関係づけが生じることが予測される。反対に、男性の場合は発達とともに習得されるはずの他者指向的側面の欠如によって自己関係づけが引き起こされるのではないかと考えられる。

以上より、本研究の目的を次のように設定する。まず、青年期における自己関係づけが共感の諸側面から受ける影響を調査する。その際、共感の認知的側面・情緒的側面の次元と自己指向性・他者指向性の次元からその特徴を検討する。加えて、共感性が自己関係づけに及ぼす影響のありかたに性差があるかを併せて検討する。

2. 方法

調査対象・調査時期

2015年7月に近畿地方の4年制大学に通う学生に対して質問紙調査を実施した。調査への協力は強制でないこと、個人情報をはじめ回答によって得られたデータは厳重に保管されることなどを告知し、調査協力者の自由意志とプライバシーに配慮して調査を行った。大学生144名 (男性54名、女性84名、性別不明6名、 $M=21.25$ 歳、 $SD=2.57$ ) から有効回答を得た。性別不明の6名については、性差を検討する分析の際には除外した。

調査内容

1. 多次元共感性: 鈴木他 (2008) の多次元共感性尺度を用いた。「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向的反応」の5因子からなる全24項目である。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で尋ねた。被影響性は他者の感情や意見に影響されやすい素質的な傾向である (項目例: 自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい)。想像性は自己を架空の人物に投影させる認知傾向である (項目例:面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する)。視点取得は相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向である (項目例:常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている)。自己指向的反応は他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応である (項目例:他人の失敗する姿をみると、自分はそうなりたくないと思う)。他者指向的反応は他者に焦点づけられた情緒反応である (項目例:

悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる)。

2. 自己関係づけ: 金子 (2000) の自己関係づけ尺度を用いた。「自己関係づけ」の1因子からなる (項目例: 友達が内緒話をしている、自分の悪口を言われているのではないかと気になる)。全12項目で「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で尋ねた。

### 3. 結果と考察

#### 全体的傾向

各下位尺度の基礎統計量を Table 2 に示す。全体、男性、女性の自己指向的反応において信頼性係数に低い値が見られたが、尺度作成時の自己指向的反応の信頼性係数も他の下位尺度と比べて低かったことや、先行研究と同様の因子構造を用いる意義を考慮し、引き続き分析を行った。

Table 2 基礎統計量

	M	SD	$\alpha$
多次元共感性			
被影響性	2.96	.81	.77
他者指向的反応	3.51	.54	.71
想像性	3.33	.74	.68
視点取得	3.57	.62	.72
自己指向的反応	3.60	.60	.51
自己関係づけ	2.90	.91	.93

次に、各下位尺度における性差を調べるために *t* 検定を行ったところ、いずれにおいても有意差は見られなかった (Table 3)。

Table 3 性別が各下位尺度に及ぼす影響

	男性 (N = 54)		女性 (N = 84)		t値
	M	SD	M	SD	
被影響性	2.86	.90	3.02	.76	1.21
他者指向的反応	3.42	.62	3.56	.49	2.28
想像性	3.18	.83	3.38	.66	2.48
視点取得	3.65	.60	3.54	.63	.99
自己指向的反応	3.55	.63	3.60	.57	.16
自己関係づけ	2.84	.91	2.89	.92	1.00

#### 多次元共感性と自己関係づけの各下位尺度間の相関

まず、共感性と自己関係づけの間の関連について検討するために、全体における各下位尺度間の相関分析を行った (Table 4)。その結果、被影響性と自己関係づけの間に中程度の正の相関が見られた ( $r = .46, p < .001$ )。また、想像性、自己指向的反応と自己関係づけの間に弱い正の相関が見られ ( $r = .38, p < .001$ ;  $r = .26, p < .01$ )、視点取得、他者指向的反応と自己関係づけの間に弱い負の相関が示された ( $r = -.27, p < .01$ ;  $r = -.25, p < .01$ )。

なお多次元共感性の下位尺度間では、他者指向的反応と視点取得の間に中程度の正の相関が見られた ( $r = .44, p < .001$ )。鈴木他 (2008) においても、特に他者指向的反応と視点取得間で他の下位尺度間より強い相関 ( $r = .36$ ) が示されている。このことより、本研究も先行研究と同様の概念を測定できたとと言えるであろう。

相関分析で得られた結果について更に検討するために、多次元共感性の下位尺度間のなかで有意な相関の見られた視点取得、他者指向的反応のそれぞれを制御変数として、全下位尺度間を対象とした偏相関分析を行った。その結果、視点取得を制御変数として他者指

向的反応と自己関係づけの偏相関分析を行ったところ、有意な相関は示されなかった ( $r = -.15$ )。このことより、他者指向的反応と自己関係づけの間で見られた弱い負の相関は疑似相関であった可能性が示唆される。

以上の結果について考察する。多次元共感性の全ての下位尺度と自己関係づけの間に有意な相関が見られたことより、共感性と自己関係づけの間には密接な関連がある可能性が示唆される。下位尺度のなかで最も自己関係づけと強い相関を示した被影響性は、他者指向性に分類されるとともに自己指向性にも分類され、かつ情緒的側面に分類される下位概念であり、他者の意見や感情に影響されやすい気質的傾向を測定する。また、次に強い相関を示した自己指向的反応も同じく自己指向性・情緒的側面に分類されるような共感性である。これらのことより、他者の感情や意見に影響されやすい気質的な傾向をもち、かつ情緒的かつ自分に引き付けて共感する人ほど、自己関係づけ傾向にあると考えられる。

Table 4 多次元共感性と自己関係づけの関連 (全体)

	1	2	3	4	5	6
1 被影響性		-.40	.10	-.19*	.19*	.46***
2 他者指向的反応			.17*	.44***	-.16*	-.25**
3 想像性				.08	.09	.26**
4 視点取得					-.16	-.27**
5 自己指向的反応						.38***
6 自己関係づけ						

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

次に、結果をさらに検討するために参加者性別ごとに相関分析を行った (Table 5, Table 6)。男性における相関分析の結果、被影響性と自己関係づけの間に中程度の正の相関が見られた ( $r = .55, p < .001$ )。また他者指向的反応、視点取得の自己関係づけの間に中程度の負の相関が見られた ( $r = -.47, p < .001$ ;  $r = -.31, p < .001$ )。なお多次元共感性の下位尺度間では、他者指向的反応と視点取得の間に中程度の正の相関が見られた ( $r = .48, p < .001$ )。そのため、他者指向的反応と視点取得のそれぞれを制御変数として各下位尺度間の偏相関分析を行ったところ、視点取得を制御変数とした他者指向的反応と自己関係づけの偏相関において無相関が示された ( $r = -.10$ )。このことから、全体と同じく男性参加者においても、他者指向的反応と自己関係づけの間で見られた中程度の負の相関は疑似相関であった可能性が示唆される。

女性における相関分析の結果、被影響性、想像性、自己指向的反応と自己関係づけの間に中程度の正の相関が見られた ( $r = .45, p < .001$ ;  $r = .37, p < .01$ ;  $r = .43, p < .001$ )。なお多次元共感性の下位尺度間では、被影響性と想像性、自己指向的反応の間にそれぞれ弱い正の相関 ( $r = .23, p < .05$ ;  $r = .23, p < .05$ )、他者指向的反応と視点取得の間に中程度の正の相関 ( $r = .48, p < .001$ )、自己指向的反応と他者指向的反応、視点取得の間にそれぞれ弱い負の相関 ( $r = -.22, p < .05$ ;  $r = -.22, p < .05$ ) が見られた。結果を更に吟味すべく、有意な相関の見られた多次元共感性の下位尺度間をそれぞれ制御変数として、全下位尺度間を対象とした偏相関分析を行った。その結果、女性参加者においては、いずれの下位尺度間にも相関係数の値に大きな差は見られなかった。

以上より、多次元共感性と自己関係づけの関連の傾向は性別によって異なることが示された。先述した通り、各下位尺度の得点には性差が見られなかったことを考慮すると、この結果から、男女によって自己関係づけと関連するような共感性のありかたが異なる可能性が推測される。よって、以降は参加者性別ごとに分析を行い性差に着目して結果を検討することとする。

Table 5 多次元共感性と自己関係づけの関連 (男性)

	1	2	3	4	5	6
1 被影響性		-.11	.01	-.23	.15	.55***
2 他者指向的反応			.18	.48***	-.11	-.31**
3 想像性				.07	-.04	.14
4 視点取得					-.04	-.47***
5 自己指向的反応						.21
6 自己関係づけ						

\*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

Table 6 多次元共感性と自己関係づけの関連 (女性)

	1	2	3	4	5	6
1 被影響性		-.02	.23*	-.13	.23*	.45***
2 他者指向的反応			.10	.48***	.22*	-.21
3 想像性				.06	.10	.37**
4 視点取得					-.22*	-.18
5 自己指向的反応						.43***
6 自己関係づけ						

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

#### 多次元共感性が自己関係づけに及ぼす影響

多次元共感性が自己関係づけを説明する程度を検討するために、ステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った (Table 7)。男女ともに多重共線性の値に問題は見られなかった。

男性においては、被影響性が自己関係づけと正方向に影響すること ( $\beta = .46, p < .001$ )、視点取得が自己関係づけに負方向に影響すること ( $\beta = -.36, p < .01$ )が示された。

女性においては、自己指向的反応、被影響性、想像性がそれぞれ自己関係づけに正方向に影響することが示された ( $\beta = .35, p < .001$ ;  $\beta = .32, p < .01$ ;  $\beta = .29, p < .01$ )。

男性・女性のいずれにおいても、被影響性の高さが自己関係づけを説明しうることが示された。このことから、性別にかかわらず他人から影響を受けやすい気質が自己関係づけに影響しているといえるであろう。

男性参加者においては、被影響性の高さのほかに視点取得の低さが自己関係づけを説明しうることが示された。視点取得は認知的側面かつ他者指向性に分類され、相手の立場に立って正しく理解しようとする過程であることから、男性の場合は、他者に影響されやすい気質に加えて、相手の立場に立って相手の心理状態を認知しようとする傾向が自己関係づけに影響を及ぼしていることが示唆される。

女性においては、被影響性のほかに自己指向的反応と想像性が自己関係づけを説明しうることが示された。自己指向的反応、想像性はいずれも自己指向性に分類される。また、これら3つのうち2つの下位尺度が情緒的側面に分類されること、最も自己関係づけに強い影響を及ぼしている自己指向的反応は情緒的側面であることより、

女性においては情緒的側面の影響が際立っていると考えられる。以上のことから、女性においては、他者から影響を受けやすい気質に加えて、他者の心理状態に際して自分に引き付けて特に情緒的に反応する傾向が自己関係づけに影響を及ぼしていると考えられる。

これまでの結果より、男性においては相手の立場にたって共感しないことが自己関係づけを引き起こす可能性、女性においては自分に焦点をあてて共感する傾向の強さが自己関係づけを引き起こす可能性が示された。

Table 7 多次元共感性が自己関係づけに及ぼす影響

	$\beta$	
	男性	女性
被影響性	.46***	.32**
他者指向的反応		.29**
想像性		.29**
視点取得	-.36**	
自己指向的反応		.35***
	$R^2$	.42***
		.40***

\*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

#### 4. 総合考察

本研究の目的は、共感性の多次元性に着目したうえで、自己関係づけにどのような影響を及ぼすかを検討することであった。

まず、全ての結果を通して被影響性傾向が高いことが自己関係づけを生み出す可能性が示唆された。被影響性は、他者の意見や感情に影響されやすい気質的な傾向を測定する概念である。自己関係づけは、他者の意見や感情が不明な対人状況において生じるが、そのような状況は、他者の意見や感情に基づいて自身の感情や判断が決定されるような人々にとって脅威的であると想像しうる。他者の気持ちを参照して自身の気持ちを決定したいにもかかわらず他者の気持ちが表明されないという不安な状況のなかで、隠された他者の気持ちを推測しようとする結果、他者の本心を被害的に解釈するのかもしれない。

次に、自己関係傾向を引き起こすような共感性のありかたが性別によって異なることが示された。具体的には、男性において他者指向性の低さが自己関係づけを引き起こすこと、女性において自己指向性の高さが自己関係づけを引き起こすことが示された。

男性の場合、他者の意図が表明されていない対人状況に遭遇した際、相手の立場に立って相手の意図を正しく理解しようとしていない人ほど、相手の真意がわからず被害的に解釈するのではないかと考えられる。視点取得は、短気さとは負の相関 (Richardson, Hammock, Smith, Gardner & Signo, 1994)、社会的望ましきや他者への感受性と正の相関 (登張, 2000) を示すといわれている。これらから、視点取得が低い、すなわち相手の立場に立って認知的に理解しようとする傾向をもつ男性は、友好な対人関係を築けないことが被害的な解釈を引き起こしているのではないかと推測される。

女性の場合、他者の気持ちがわからないような対人状況に遭遇すると、相手の真意を特定しようと感情的に考えすぎること被害的な解釈が生じると考えられる。この場合、他者の気持ちについて想像力が豊かであるために、また相手という単体について考えるのではなく自身と相手の関係のなかに答えを見つけようとするために自

己関係づけにつながるといえる。

イ研究, 17, 182-193

最後に、本研究の限界について述べる。第一に多次元共感性についての検討方法が挙げられる。本研究は情緒的側面・認知的側面、自己指向性・他者指向性という2つの次元の観点から調査を行ったにもかかわらず、各下位尺度からの検討に留まっている。これは、各下位尺度を情緒的側面・認知的側面あるいは自己指向性・他者指向性という大きな単位として合成することで異なる概念が混同されることを回避したためであるが、今後の検討の際には、より適切なデータの処理を考える必要がある。同時に、本研究では5つの下位尺度を独立した要因として扱っている。そのため、共感性の下位概念が互いこのように作用しあうことで自己関係づけに至るかについては検討できていない。この点についても検討が必要である。

第二に、本研究では共感性と自己関係づけという2つの変数のみの関連を捉えており、他の要因との関連は検討されていない。本研究によって共感性と自己関係づけに何らかの因果関係があることは示されたが、詳細な機序や媒介変数の存在は明らかにされておらず、今後更なる検討を要する。

## 5. 引用文献

- 伊藤 美奈子(2006). 思春期・青年期の意味 伊藤 美奈子 (編) 朝倉心理講座 16 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店
- 金子 一史 (1999). 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について 性格心理学研究, 1, 12-22
- 金子 一史(2000). 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480
- 森岡 正芳 (2006). 自己との出会いのゆらぎ 伊藤 美奈子 (編) 朝倉心理講座 16 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店
- 守谷 順・佐々木 淳・丹野 義彦 (2007). 対人状況における対人不安な判断・解釈バイアスと自己注目との関連 パーソナリティ研究, 15, 171-182
- Richardson, D. R, Hammock, G.S., Smith, S.M., Gardner, W., & Signo, M. (1994). Empathy as a cognitive inhibitor of interpersonal aggression, *Aggressive Behavior*, 20, 275-289.
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成 ——自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—— 教育心理学研究, 56, 487-497
- 鈴木 有美・木野 和代・出口 智子・遠山 考司・出口 拓彦・伊田 勝憲・大谷 福子・谷口 ゆき・野田 勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47, 269-279
- 丹野 義彦・石垣 琢磨・杉浦 義典 (2000). 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成 心理学研究, 71, 379-386
- 登張 真稲 (2000). 青年期の共感性の発達 ——多次元的視点による検討—— 発達心理学研究, 14, 136-148
- 登張 真稲 (2003). 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, 9, 36-51
- 山内 貴史・須藤 杏寿・丹野 義彦 (2008). 被害妄想観念と性格特性5因子モデルおよび帰属スタイルとの関連 カウンセリング研究, 41, 161-168
- 山内 貴史・須藤 杏寿・丹野 義彦 (2009). 日本語版パラノイア・チェックリストの因子構造および妥当性の検討 パーソナリティ

Appendix 1 自己関連づけ尺度 (金子, 2000)

友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる  
話している集団と目が合うと、自分のことを言われているのではないかと気になる  
友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと気になる  
周囲の笑い声が、自分を笑っている様に思える時がある  
隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある  
自分の近くにしゃべっている集団がいて、自分の事を言われているのではないかと思う時がある  
知人が挨拶してくれなかった時に、無視されたと思うことがある  
恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う  
人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事をいつているのではないかと思う時がある  
部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある  
会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる  
いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかと思うことがある

Appendix 2 多次元共感性尺度 (鈴木・木野, 2008)

被影響性  
まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思えてくる  
自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない  
物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ  
自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい  
他人の感情に流されてしまうことはない  
他者指向的反応  
悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる  
悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない  
他人が失敗しても同情することはない  
人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる  
まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといいなあとと思う  
想像性  
面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する  
空想することが好きだ  
感動的な映画を見た後は、その気分いつまでも浸ってしまう  
視点取得  
自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする  
人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする  
常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている  
相手を批判するときは、相手の立場を考えることができない  
自己指向的反応  
他人の失敗する姿をみると、自分はそうなりたくないと思う  
苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う  
他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じる人が多い  
他人の成功を素直に喜べないことがある